

文学館だより

平成28年10月1日
若山牧水記念文学館
TEL68 - 9511

秋^{やまと}かぜや日本の国の稲の穂の酒のあぢはひ日にまさり来れ

「死か芸術か」 収録

歌の意味

秋風が吹いている。我が^{やまと}日本の国に広がる稲穂から作られる酒の味わいは、日ごと深まってくる。なんともありがたいことだ。

歌の背景

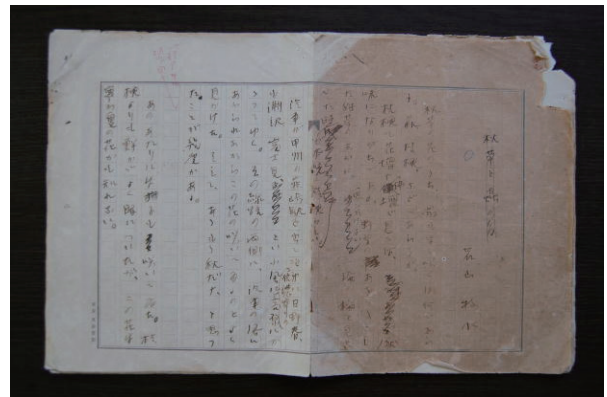
牧水の愛した酒は、日本の象徴的風景である稲から作られる。人の手を最高にかけて作り出される酒。自然からの恵みに感謝し、ゆったりと味わうべく酒に向き合う牧水の姿がそこに見えるようだ。明治45年作。

直筆原稿展 始まる

9月24日(土)～11月27日(日)

直筆原稿『秋草と蟲の音』

『秋草と蟲の音』は彼岸花、リンドウコオロギなど、あちらこちらで見かける秋の草花、虫たちを挙げ、短歌を交えながら牧水が感じるままの印象を書き留めた作品です。大正13年に執筆されましたが、単行本としての収録はありません。特別に珍しいものが登場するわけでもなく、季節の移ろいを牧水とともに身近に感じることができます。加筆修正の跡が残っているところも魅力のひとつです。



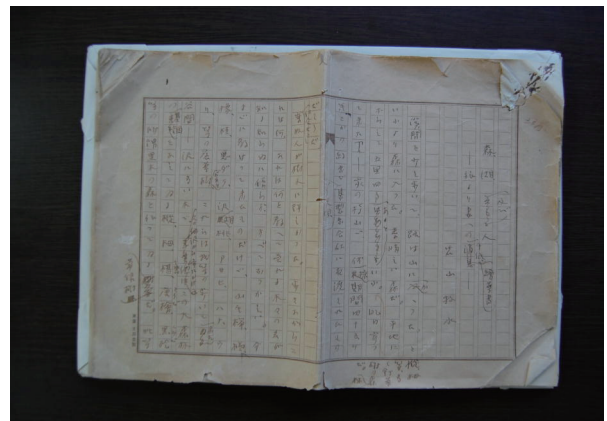
『秋草と蟲の音』直筆原稿1ページ目

当文学館企画展示室において、原稿用紙 枚に及ぶ直筆原稿を展示しています。翻刻版、原稿に登場する動植物の写真入りパネルも併せて展示しています。

直筆原稿『森、湖、及び人』

一 旅より妻への手紙、繪葉書 一

『森、湖、及び人』は、紀行文『みなかみ紀行』に描かれている旅の終盤、丸沼から中禅寺湖や日光を散策した様子を、喜志子に宛てた書簡風にまとめられた作品です。『みなかみ紀行』の後半を描いた『金精峠より野洲路へ』と多く重複が見られるのが特徴です。大正11年の作品ですが、こちらも単行本としての収録はありません。こちらも加筆修正の跡が残っています。



『森、湖、及び人』直筆原稿1ページ目

当文学館企画展示室において、原稿用紙 枚に及ぶ直筆原稿を展示しています。翻刻版、原稿に登場する名所案内パネルも併せて展示しています。

牧水を偲び県内外から200名集う 9月17日(土)



裏山歌碑にて献酒する十屋市長
(3日後、台風16号の被害に遭い歌碑へ続く山道が崩壊しました。早急の復旧が待たれます。)



夫婦歌碑にて献酒する巫女



牧水の歌を斉唱する坪谷小児童



対談「風になりたかった牧水」
上田耕市氏 若山牧水延岡顕彰会副会長
伊藤一彦氏 歌人、当文学館館長



牧水御膳を囲み牧水談義にぎわう

第66回牧水祭が命日9月17日(土)に行われました。台風接近に伴い、直前までハラハラしましたが、当日は見事快晴の朝を迎えることができました。

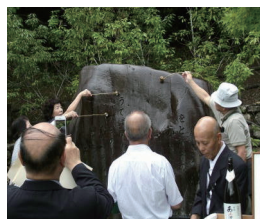


事前に裏山歌碑にて主催者らが献酒を済ませた後、生家横夫婦歌碑前において歌碑祭が執り行われました。



歌碑祭

- 1 開式
- 2 牧水の短歌朗詠 岩下 富男 様
- 3 献酒
巫女 三浦明日香
高館 夏美
主催者
若山家親族代表
来賓及び団体代表
地元代表
- 4 閉式
- 5 一般参加者献酒



「牧水公園ふるさとの家」に場所を移して

坪谷小学校児童のふるさとの歌3曲斉唱より【第2部 牧水を偲ぶ会】が幕を開けました。子どもたちの澄んだ目、澄んだ歌声に今年も目を潤ませる参加者の方々がいらっしゃいました。

次に目を見張るものといったらやはり対談でしょう。上田耕市氏と伊藤一彦館長が「風になりたかった牧水」と題して語りました。『牧水は酒の歌よりも多く風の歌を詠んでおり、自分が風となって、行きたい時に行きたいようにどこにでも行く、といったものを求めていたのではないだろうか』と上田氏は訴えました。

そして、上田氏から参加者へお土産として虎屋の包装紙(牧水短歌が一面に印刷してあります)をいただきました。わずかですが文学館に残っています。

最後は、牧水御膳を囲んでの懇親会。今年は「なりきり牧水」の方々にもご協力いただきました。没後88年経った今でもなお多くの方に愛され続ける牧水。顕彰活動の更なる充実を図らなければと思う一日となりました。

滞りなくすべてを終了し、片づけを終えようとしたその時、雨雲がたちこめ、一気に天候が崩れました。